

八戸市史編纂委員会編

八戸市史、史料編

近世Ⅰ・Ⅱ

工藤 祐 董

昭和四十年、八戸市開市三百年記念事業の一環として、市史編纂委員会が設置され、近世経済史に關し数々の業績をあげられている森嘉兵衛博士監修の下に、青森大学客員盛田稔氏を編纂委員長として編纂委員諸氏の四年間にわたる調査研究の成果が実り、「八戸市史史料編 近世Ⅰ」が昭和四十四年三月に刊行され、続いて昭和四十五年十二月「八戸市史史料編 近世Ⅱ」が刊行された。「近世Ⅰ」は寛文二年から元禄五年までの、いわゆる八戸藩の草創期をあつかったものであり、「近世Ⅱ」は元禄六年から宝永三年まで、いわゆる元禄の幕藩制安定期を収録している。

「近世Ⅰ」「近世Ⅱ」に収められている史料の中核となっているのは八戸藩の「藩日記」(上杉修氏所蔵)、「藩勘定所日記」(同上)、雜書(盛岡藩の日記、盛岡市公民館所蔵)であり、補足史料として、八戸藩修驗総持藤原院の關係文書である「常泉院文書」(野田健次郎氏所蔵)、「阿部家文書」(藩政時代に山崎を勤めた阿部家に伝わる文書)、篤馬家訓(南部藩主市原篤馬の編

纂になるもの)をえらび、幕府との關係を見るためには「徳川実紀」から収録している。

したがって、本書はいわば官撰史料を中心にした編年体の史料集である。八戸市史付録Ⅰに森博士が述べられているように「一般民衆の記録の集成と言うよりは藩政を中心とした政治、財政、経済、宗教、労働、社会問題が克明に記され、それを通じて一般民衆の生活がよく知られる」のである。

「近世Ⅰ」は寛永五年初代八戸藩主直房の誕生の事を冒頭にかかげ、ついで徳川実紀寛文四年十二月六日の項を収録し、八戸藩創設の由来を次のように示している。「一 六日陸奥国盛岡城主南部山城守重直。かねて公の御旨にまかせ養子せん事こひ置てうせしかば。遠領万石を弟二人に分て。隼人重信八万石。救馬直房二万石給う。この重直は故信濃守利直が子にて。慶長十七年十二月廿日 台徳院殿。父利直が邸にならば給ひしとき初めて見え奉り。元和四年十二月廿三日敘爵して山城守と稱し。寛永九年家つぎ。この九月十二日九十九才にて卒せしなり。」普通であれば山城守重直が嗣子がなま死したたので御家断絶となるべきところであるが、「かねて公の御旨にまかせ養子せん事こひ置て」死したので、特別の計らいとして、重信の第二人子とそれれ八万石、二万石の大名として新規に取り立てる形式を取ったものと聯される。幕府は、重信が死去して約三ヶ月遺領の処

藩を決定しなかつたので、南部家中は後嗣をめぐる種々の思惑から三つ巴となつて、御家騒動の場面をくりひげに事を、篤馬家訓から参照として付記しているのので、以前に決定に至るまでの事情を、ある程度推測できる。さうにして創設された八戸藩の本高は二万石、其高を米石の近世工口ページンであるが、領地の大半は山部であつて平野部は少ないこと、しかも冷害地帯であることから、藩財政が米作収入にのみ依存できなかった事、米作が畑作・馬・鉄・紫根・漆・水産物等の米作以外の特産物にかなり依存し、これらの産業を発展させ、平くから、特産物の商品化を図らざるを得なかつたこと、藩政後期にはこれらの特産物は藩専売制の枠にとりこまれ藩財政の立直しに利用されることになるが、等が八戸藩の財政的、経済的特殊事情あるいは背景として考えられる。このような特殊な事情を窺はけるような記事が「近世工口」近世工口の至るところに見られる。馬に関する記事が多い事もその一例であり、家臣に役馬の飼育を義務付けている事も、単に家臣の奉公義務と言うだけではなく、産馬政策の一つの現われと見られよう。大豆、鉄・漆・紫根、こはく、水産物等の移出の記事、あるいはこれ等に対する沖の口礼金（輸出税）等の記事も随所に見られ、これらは、藩の財政経済の特色を克明に現わしている。米作収入が少なかったため、年貢米確保の必要から、米の消費節約が嚴重に行なわれた事を示すものとし

て、田植時に子供を田に連れてゆくとか、田植時に、にぎり飯は無用などと触れた記事等（近世工口二ページ）がある。また年貢米逋の百姓に対する嚴罰家財没収は勿論、本人妻子をも収公し、あるいは小者、召使として勤めさせ、あるいは競売にする等、さながら農民衰史を現るの體がある。「年貢の納め時」はかくも農民にとつて切実なものであつた事を如実に語つたのであるのが「年貢未進」に関する記事であり、諸所に見える欠落（逃散）などもこのような背景から来る事が知られる。農業に依存する封建社会の宿命とでも言うべきこのような事案が本書上、下には克明に記されている。

また法制史の面から見て興味のある記事が散見される。近世刑法あるいは刑事訴訟法に関する一つの記事を拾つて見る。

「近世工口」寛文八年九月四日の項に、（一）奥内村（南部領）筆者註（平五郎と申者、馬嶋守村（八戸領）筆者註）左太郎岡村三四郎柳引村（八戸領）筆者註（四縣右三人にてぬすみ申由式人走り左太郎老人とらへ置申候四縣三四郎からめ可然由野辺地より野辺地忠左エ門被申越候付柳引村へ太田十右エ門足輕三人、事件は八戸領の者三名が南部領で馬を盗み、一人は捕えたが、あとの二名は逃亡したから逮捕してくれど、南部家野辺地忠左エ門から依頼があつたので、八戸藩では柳引代官が足輕をつれ逮捕に向つたと言ふことである。續いて九月五日に

は御引村に四帳と云う該当者が無い事、また嶋守村に三
四郎と云う石前の者が三人いるが別に疑わしい氣もなく
アリバイもあることが判明し、その旨野辺延忠左エ門に
回答している。九月九日には南部領田名部代官から犯人
として御引村人の尋問調書が八戸に送られて来たが、その

尋問調書と、前に野辺延忠から送られて来た調書が相違し
ている事が判明する。九月十日には犯人左太郎の尋問調
書にもどづいて嶋守村で容疑者を捕え尋問している。容
疑者尋問の結果、嶋守村之内江花沢左太郎、日野戸頼四
郎太郎、荒壁掃部助子二郎以上三名の尋問調書を九月十

二日に南部藩へ、同十三日には在江戸の藩主に送つてい
る。徳川末期においては地領の者が自領において犯罪を
犯した場合犯人を逮捕すれば、犯人の人別地の藩に通報
して、その藩の役人、家来等を立合わせ尋問調書を取り
た上、犯人の身柄を人別地の藩に引渡し、幕府に吟味願
を出し、幕府が吟味、仕置をするのが通例であるが、こ
の事件の場合は幕府に吟味を頼み出る事なく、九月十七
日、八戸藩から南部藩の家老に対して、本件は犯人処刑
の可否について意向を問ひ合わせ、その意向が犯人処刑
を可とするのであれば早速処刑する旨を伝えている。八
戸藩では九月廿六日さらに犯人のうち左太郎を拷問して、
これまでの自供に相違がない事を確かめ、九月廿七日、
犯人左太郎の親信夫、掃部助の子次郎を五人組預とし、
十二月五日左太郎の女を成敗している。この場合四郎太

郎の処置については同等でない。事件とその処置
の詳細は本書の記事だけでは判然としないが甲類人別の
者が乙類において盗みをした場合、犯罪地領主には仕置
権がなく、人別地の領主が犯罪地の領主と協議の上仕置
権を行使している事をこの例は示している。

法制史の面からも本書上・下は興味ある史料集である
が、社会史、政治史、経済史等の各分野においても、貴
重な資料あるいはインデックスとして、研究者に貢献す
るところ大なるものがあると信じられる。

従来八戸藩を研究する場合、インデックスあるいは資
料としてあげられるものは、活版本としては、「八戸藩
史料」や「青森県史」が主なものであったが、これ等は
八戸藩の藩日記の内容に照して誤まりが発見されている
今日、藩日記類が本書によって活字化された意義は極め
て大きく、藩政の展開過程をかなり詳しく察知できる。

八戸市史編纂委員会においては史料編として近世十卷、
中世二卷、記述編として六巻を計画しているとの事であ
るが、史料編から刊行をはじめられた編纂委員会の意見
に敬意を表すると共に、史料編の続刊を期待したい。近
世上・下の編集にあたって、中心となつておられる野田
健次郎氏はじめ編纂委員諸氏の御労苦をさぞかしと思わ
れるが、なしろるならば、藩日記のみならず、その附属
文書等の重要なものは本書に取り入れることを期待した
い。